
跡取り息子

古河晴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

跡取り息子

【Nコード】

N4233T

【作者名】

古河晴香

【あらすじ】

まだ貴族社会だった頃の英国。

アルバートはパーティーで、美しい未亡人に出会う。

無垢で狡猾な彼女の計画とは？

ミルドレッド。

あなたに出会ったとき、

私はまだ少年と言っていい年だった。

あなたはあの老侯爵の邸宅でのパーティーで、
たくさんのお装した男に囲まれて、
まるでチェスの女王のように背筋を伸ばして、
あでやかに笑んでいた。

あなたの喪服は、

少し前に夫の伯爵に先立たれたからだった。
仲むつまじかったと聞く。

あなたは暗い金の巻き毛を、
頭の高い位置で一部束ねていて、
耳の後ろから残りを垂らしていた。

あなたの存在からは
フルーツの香りが漂う。

あなたは、無垢で狡猾。

ミルドレッド。

事は計画通りに進んでいるかい？

あなたは探していた。
お目がねにかなったのが僕だ。
僕は年若い子爵。
「アルバート。あなたがいいわ。
送ってくださいる？」

男たちの囲いを抜けて、
あなたが微笑みを浮かべて近づいてきたとき、
私はあまりに驚いて、
ただ、喜んで、と言うのが精一杯だった。

あのおときあなたは、私を選んだのだ。
共犯者に。

事は計画通りに進んでいるかい？

私はそれから有頂天だった。
目に見えるもの全てが彩度を上げた。

私を胡散臭そうに見ていたのが、
あなたの義理の兄だ。

あなたの夫が死んだ今、
彼が伯爵の位を継いでいた。

生来の道楽者だったため

あなたの夫である弟が
家督を継いでいたのだが、
彼が亡くなったため、
伯爵となった。

他に適当な男子がいなかったのだ。

自由に財産を食いつぶしていると
もっぱらの噂だった。

あなたはといえば、
私をすっかり夢中にさせた後で、
告白した。

お腹に、亡き夫の子がいると。

私は了解した。

夫を愛していたというあなたが
喪服姿ながらも
あんなにパーティーに出没していたのは、
一緒に義理の兄と戦う相手がほしかったのだ。

「アルバート。」

この子の父親になってくださる？」

あなたは無垢で狡猾。

それほど夫を愛していたあなたが、

その子の父親に私を選ぶのであれば、
光栄です。

喜んでお受けしましょう。

「ありがとう、アルバート」

あなたは婉然と笑う。

そして子供が生まれた。

あなたはその子に、

父親と同じ名前、クリストファーとつけた。

それは義兄に対するアピールかもしれない。

世間が私の寛容さに好奇の目を向けようと、
私には何の問題もない。

子供はかわいく、不思議な生き物だ。

大人たちの静かな戦いをよそに、

クリスはすくすくと育った。

ミルドレッド。あなたは少し早く生き過ぎたね。

親族会議で、クリスが伯爵に決定した瞬間を、
見せてあげたかったものだよ。

クリスは利発な12歳だった。

私も頑張った。

伯爵の後見人にふさわしい人物に見えるよう、
若いなりに頑張った。

私はそのときまだ29だった。

ミルドレッド。あなたはほんとに、
若造を選んだものだったね。
うまくいったからいいものの。

全て計画通りに進んでいるかい？

クリスはいま17だ。

私^があなたに出会った年。

私がクリスの父親になる運命が決まった年。

クリスはひどくやせているよ。
時に痛々しく見えるくらい。

目は大きくて、眼差しは鋭いよ。

上品な黒いスーツがよく似合うよ。

この前のことだ。

私たちは一緒にランチをしていたんだ。

仕事が忙しい私には珍しいことだけだね。

そうそう。私は相変わらず仕事人間だよ。
子爵様がそんなに働く必要はないのに、と、
よく言われるよ。

それはね、お金を稼ぐ必要はないけれど、
社会的に一目置かれ、
有用な人脈を作るためには、
有閑貴族とのんびり
ゴルフをしている場合では
ないということなんだ。

クリスのためだよ。
褒めてくれるかい？

さて、そのランチだが、
白いテ・ブルクロスをかけた丸テーブルを、
庭に向けて開け放った窓際に置いて、
ランチはコックが作ってくれた
とてもおいしいものだったんだけど、

クリスはテ・ブルに向かって斜めに腰掛けて、
つまらなそうに足を組んで
ぼんやりしていたんだ。

私にはそんなクリスが微笑ましかったね。
子馬や子鹿を見ている気分だ。

クリスは、庭の方に顔を向けていたが、

庭を見るでもなく、
思わず口から出たかのようにつぶやいたよ。

「あんたが憎いよ、アルバート」

そう言ってしまったから、
ついに言ってしまったことに、
自分で観念して、
私の方をじっと見据えながら、
もう一度つぶやいた。

「あんたが憎いよ。アルバート」

憎いと言いながら、
涼しい目をしている。

私の口元は、なぜか悠然と
微笑みを浮かべていた。

仕事のライバルに向かって
牽制している気分だ。

ミルドレッド。あなたの子は、
上出来だよ。

私をここまで困らせている。

「憎いよ、アルバート。」

憎いというよりむしろ、

どうしよう、と

問い掛けられているような気になる。

白いテーブルクロスに

黒いス・ツの片膝ついて、

クリスは身を乗り出す。

なんて行儀が悪いんだろうね。

真正面に落ち着いて

微笑んで座っている

私のネクタイの根元をつかんで、

「ねえ、アルバート」

と言う。

私はずるいよ。

逃げなかつたんだから。

あなたの「娘」は、

実はあなたに似ているのかもしれない。

無垢で狡猾だ。

あなたと私は共犯だ。

娘を息子と偽り、

義兄から伯爵の位を奪った。

あでやかな花のようなあなたと違って、
花開くことを止められて、

神経質で痛々しい娘。

彼女が私の首根っこをつかんでいる。

私は運命に身をまかせて、目を閉じた。

ねえミルドレッド。

これも全てあなたの

計画通りなのかい？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4233t/>

跡取り息子

2011年5月28日12時13分発行